

現代文明と詩心の復権

——詩と宗教と宇宙論

川田洋一

スリニバス会長の詩集『ブツダ』のなかに、人間の永遠なる生死と宇宙生命について詩った一節がある。

「生命は永遠であり

死は「門口」にすぎない

死は 新たな生命の誕生に向けての休息期なのだ

生命は誕生によって現われ

生命は死によって退く

そして 宇宙生命の中へと帰っていくのだ⁽¹⁾

また、宇宙生命の側から、人間の生死を表現した詩もある。

「生と死は

永遠なる生命の流れの表出だ

すべての個々の流れは

広漠たる宇宙の

本質的な実在に溶け込んでいる

総体的な流れは 宇宙の潮流だ——

宇宙の深淵の中核である妙なる法則の

すべての一体で不可分の そして止むことのない働き⁽²⁾

スリニバス会長が、「妙法」(Mystic Law)と表現した

宇宙根源の生命を、アーノルド・トインビーは、「宇宙の究極的実在」としてとらえている。

「ワーズワスの『不死の海』の直喩をもってするならば、われわれは人間を——地球上の人間がわれわれの知る唯一の人ののだが——『不死の海』の表面でもり上って碎ける波か、ふくらんで碎ける泡だと考えることもできよう。波や泡のように、人間もそれじたいは果敢はかないものである。しかし、同時に波や泡のように、人間も永続的な何かの仮りの姿なのかもしれない。この地球上に精神と肉体を持つ有機体として生きそして死ぬ人間は、永遠な精神実在のあらわれなのかもしれない⁽³⁾」

「不死の海」の大海そのものが、「妙法」であり、「永遠な精神実在」である。人間をはじめとする万物は、この「宇宙生命」の働きのとして、「顕在化」(生)と「潜在化」(死)をくり返す存在である。トインビーによれば、「個々の生命」「個々の現象」は、丁度、大海の表面でもり上がって碎ける波のような存在であるという。「不死の海」のうねりは、海面に現れて波となり、

海中に没して見えないうねりとなる。同じように、人間の「生」としてあらわれた一個の波は、「死」によって「妙法」という「宇宙生命」の大海に溶けこんで見えなくなってしまう。しかし、スリニバス会長は、さらに、「死」は新たな「生」への「門口 (Gateway)」に他ならないと詩っている。このようにして、人間の「生命」は、不死なる「宇宙生命」への帰入と顕現をくり返しながら、永遠の「生」「死」をくり返すというのである。

さて、トインビーは「人間」は、永遠なる「究極の実在」のあらわれであるとしても「われわれはわれわれの存在の根源であり目的地である究極の実在と、自分がどういふ関係にあるのかも知らずに生きそして死なねばならない⁽⁴⁾」として、次の三つの考え方をあげて、現代の人間に問いかけてくるのである。

「地上の果敢い生命であるわれわれは、人として一時そこから引き離されているこの実在との関連において、何の意味も持たない偶然の附属物なのか？ それともわれわれは、人生の弾道という短

かい期間をこえてはつづけることのできぬ邪悪な

放れ業によって、存在の根源から自分自身を引き

離れた放蕩児なのか？ それとも、地上の人生は、

『あれ』と同一のものである『汝』が、なんらかの

意味を持つ（人間としての）目的のために、永遠な

実在に助けられて果す使命なのか？」⁽⁵⁾

「自分はどこから来て、どこへ行くのか。そして、今、なぜここにいるのか？」——生きることの究極の

意味、根拠を問うトインビーの問いかけは、東におい

ては、ウパニシャッドの哲人や釈尊以来、西において

は、ソクラテス、プラトン以来、人々が、アイデンテ

イティ・クライシスに直面する毎に、くり返し問い続

けてきた哲学、宗教のテーマである。

そして、この根源的な問いは、二十一世紀に入った

地球人類にとって、最も切実な課題となっている。す

で、世紀の変わり目に、池田SGI会長は、グロー

バリゼーションの進行する現代地球文明のなかでの

人々のアイデンティティ・クライシス克服の緊急性を、

一九九九年の「一・二六提言」で、次のように呼びか

けていたのである。

「全世界を巻き込みながら容赦なく進行するグロー

バリズムのスピード、荒々しさについていけず、

途方にくれながら、内へ内へと自閉していかざる

をえない閉塞感。目まぐるしい時代の変転の波間

に「根無し草」のように漂いながら、なおかつ生

きる根拠を問わなければならぬ不安感——そう

した寒々とした心象風景は、山積する「地球的問

題群」にもまして、世紀の変わり目を迎えようと

している人類が、避けて通れぬ課題ではないでし

ようか」⁽⁶⁾

現代人の自我は、アイデンティティ・クライシスの

深い不安の闇のなかで、グローバリゼーションの荒波

に抗しきれず、他者と社会と大自然から「分断」「分離

」されて、限りなく「縮小」していく。しかも、存在の

根拠たる「永遠なるもの」「根源的なるもの」からも

「分断」されて「分離」し、現代物質文明の急激な変転

のなかで「根無し草」のように漂っているという。

他者からも、存在の根拠からも分断された現代人の

自我の孤独と疎外感、閉塞感が、怨念、憎しみや絶望、悲哀、不安、恐怖を生み、戦争、紛争、非寛容、差別につながっていく。一方では、物質文明のなかで、物質的欲望をはじめ、権力、名誉、名声欲等が貪欲化し、他者と大自然の「搾取」にまでつき進んでいくのである。

このような意味において、アイデンティティ・クライシスと地球的問題群は「地続き」であり、その中心には、すべての存在から「分断」され「分離」された「矮小」なる自我が、不安にさいなまれつつ、広大な世界のなかでただ一人、たたずんでいるのである。

そして、この自我は、不安の闇のなかで、トインビールの設問のごとく、自らの生存を、何の意味も持たない単なる「偶然的の附属物」か、または「存在の根源から自分自身を引き離れた放蕩鬼なのか」と自問せざるをえないのである。しかし、多くの現代人の自我は、「それとも、ブラフマン（梵）即アートマン（我）として、永遠なる存在から託された使命があるのか」との問いにまで至っていないようである。

この人生の「生きる意味」と「死ぬ意味」の覚知、つまり、アイデンティティ・クライシスの克服の前提は、現代物質文明の進展のなかで吹きあれる「分断のエネルギー」に抗して、自己と他者、家族、人類、そして大自然という「外なる宇宙」を「結びつける」ことであり、同時に、自己の「内なる宇宙」の探索を通して、「存在の根源」である「宇宙生命」との「融合」をはたすことである。

本稿のテーマである『詩心の復権』とは、まさに自己自身を「外なる宇宙」と「内なる宇宙」に「融合」し、この人生に大宇宙から託された使命の覚知を促す労作業のすべてをさすのである。その尊い役割をなす主体となるのは、詩の力であり、文化、芸術の力であり、そして、宗教の力である。

池田SGI会長は、「詩人は永遠を見る人である」「詩人はいつも元初の地平に立っている」「詩人は宇宙の法則の探究者であり、万象を黄金の大生命の表れと見る」「詩人は、平凡な日常にも、不滅の生命が浸透していることを知っている」といい、それ故に、「詩人は

戦う人である」「彼は、世界のどこかで非人間的に扱われる人間がいることを容認できない」とも表現している。⁷⁾

ここにいう「永遠」「元初の地平」「黄金の大生命」「不滅の生命」とは、トインビーが「究極の精神的実在」といい、スリニバサ会長が「妙法」と表現した「宇宙生命」そのものである。詩人は、常に永遠なる「究極の実在」「法(ダルマ)」を豊かな感性で受け、感得して、それを言葉として表現する人である。詩人は、万物の躍動、変転のなかに、「宇宙生命」「法(ダルマ)」の顕在化を洞察し、その感動を人々に伝える人である。それ故に、詩人は、現代人の孤独と不安にさいなまれている矮小化した「自我の窓」を開き、心の中に「永遠なるもの」の息吹を吹きこむのである。「宇宙生命」の息吹は、その「法」に内包された慈愛と智慧と意志力で、矮小化した自我を拡大し、境涯を広げ、生きる勇氣と喜びと意義を与えるのである。こうして、詩人の言動は、人々の心を「宇宙生命」の元初の胎動とつなぎ、蘇生へと導く力を発揮するのである。

これまで「分断」「分離」されていた「宇宙生命」との「心の回路」を開いた個々の生命は、「永遠なるもの」の息吹に支えられて、心を拡大しつつ、善心を強化していくことが可能になる。他者への同苦、慈悲の力、他者との共生の智慧、他者を傷つける貪欲を自ら抑制する力、そして、他者なる存在への信頼感を回復し、増強していくのである。ここに、これまで矮小化され、不安と他者への不信感とさまざまな煩惱の狂乱に悩まされていた自我は、善心の強化によって、他者へと「心の扉」を開き、家族、民族、国家、人類、そして大自然との心の交流へと拡大していくのである。家族や社会、大自然との「分断」の淵は、善心によって結合されていく。

同時に、「詩心」にそなわる善心は、暴力性、差別、偏見、貪欲等の煩惱に支配され、人間と人間、人間と社会、そして大自然、大宇宙との間に「分断」「分離」を引き起こす者と戦うのである。社会にうずまく「分断のエネルギー」を、「善心」で打破り、他者の苦悩とともに克服すべく努めるのである。慈悲、非暴力、信

頼、そして共生の智慧を發揮して、他者の苦しみへの同苦、共感から、「善の連帯」を広げつつ、社会に充滿する煩惱と戦うのである。故に、「詩心」とは、永遠なる慈悲に生きる」とともに「悪と戦う」勇敢な心をさすのである。

こうして、「詩心」につちかわれた人々は、「内なる宇宙」と「外なる宇宙」との慈悲と智慧と勇氣にみちた豊かな交流を通して、自我を拡大しつつ、この世に生を受けた使命、人生の意義を体得していくことにならぬのではなからうか。つまり、トインビーのいう「永遠な実在に助けられて果す使命」である。

創価学会戸田第二代会長は、第二次世界大戦の際、当時の日本の軍国主義に反対し、初代牧口会長とともに投獄された。牧口先生は獄死されたが、戸田先生は「獄中」にあつて「無量義経」「法華経」の身説、二百万遍におよぶ南無妙法蓮華経の唱題によつて、「宇宙生命」の体得という「悟達」の大境涯を示されている。その第一には、「仏とは生命である。生命の表現である。外にあるものではなく、自分自身の命にある。いや、

外にもある。それは宇宙生命の一実体である」との「宇宙生命」体得の悟達であつた。そして、第二に、「宇宙生命」「永遠なるもの」から託された、この人生での「使命」の体得であつた。それは「法華経」に登場する「地涌の菩薩」の一員としての自覚であつた。

戸田先生は、「慈悲論」のなかで、「宇宙生命」の悟達の知見を次のように記している。「この宇宙は、みな仏の実体であつて、宇宙の万象ごとく慈悲の行業である。されば、慈悲は宇宙の本然のすがたといふべきである」とのべ、この大宇宙に生を受けた人間の使命を次のように示している。

「宇宙自体が慈悲である以上、われわれも日常の行業はもちろん、自然に慈悲の行業そのものではないが、人たる特殊の生命を發動させている以上、人間は、一般動物、植物と同じ立場であつてはならぬ。より高級な行業こそ、真に仏に仕える者の態度である」⁽¹⁰⁾

そして、「自覚した真の慈悲に生きなければならぬ」⁽¹¹⁾という。

大宇宙の働きは、すべて、「宇宙生命」としての「法(ダルマ)」の慈悲の顕在化である。生きとし生けるものの営みのなかに「宇宙生命」の妙なる慈悲と智慧が輝いている。詩人や芸術家は、万物の営みのなかに、妙なる「ダルマ」の創造美を発見し、感動しつづつ、それを詩や芸術に表現し、人々に伝えようとする。宗教者は、「宇宙生命」の尊厳性をさし示しつづつ、「人間」が「大宇宙」から託された「宇宙論的使命」を実践にうつすのである。このような意味において、詩人も芸術家も宗教者のところにも「宇宙生命」の働きに基盤をおく「詩心」があふれている。「詩心」が「宇宙論的使命」の実行を促すのである。仏教においては、大宇宙の慈悲の行業に参画し、その働きを増幅する人格像を、菩薩として表現する。

「法華経」には、葉王、妙音、観音、普賢、文殊等の他の經典にも説かれる多くの菩薩とともに、その中心的存在として「法華経」独自の菩薩がえがかれている。その菩薩は、大地を割って出現する地涌の菩薩である。そして、地涌の菩薩は、「宇宙生命」そのものか

ら、直接出現した菩薩であると示されるのである。涌出品第十五に、この現象世界への登場が、次のようにえがかれている。

「仏は是れを説きたまう時、娑婆世界の三千大千の国土は、地皆みな震裂して、其の中よ於り無量千萬億の菩薩摩訶薩有つて、同時に涌出せり。……先よりこゝとこ尽く娑婆世界の下、此の界の虚空の中に在つて住せり。……是の菩薩衆の中に、四導師有り。一に上行と名づけ、二に無辺行と名づけ、三に淨行と名づけ、四に安立行と名づく。是の四菩薩は、其の衆の中に於いて、最もこ為れ上首唱導の師なり」⁽¹²⁾

ここにある「虚空の中に在つて住せり」の文を中国の天台は、『法華文句』で、「法性之淵底。玄宗之極地」⁽¹³⁾と解説している。つまり、「虚空」とは、万物を貫く真理の根底であり、奥深い教えの究極という意味であり、「宇宙生命」としての「法(ダルマ)」をさしている。

日蓮大聖人は、「御義口伝」の中で、「真理」としての宇宙生命から顕在化する大宇宙の創造的慈悲の働きを、地・水・火・風の四大として次のように説い

ている。

「火は物を焼くを以て行とし水は物を浄むるを以て行とし風は塵垢じんこうを払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり」⁽¹⁴⁾

火大は、物を焼き、光となって万物を照らす働きをさし、水大は物を浄化する働きをさし、風大は塵を吹きはらい、地大は生物をはぐくみ育てる働きをさすという。この大宇宙を創造し、形成しゆく四大の働きは、宇宙にそなわった本然的慈悲行なのである。

この四大という宇宙本然の慈悲行を、自らの生命活動の中に躍動させ、「宇宙生命」の働きと共鳴しゆく行動をなすのが、地涌の菩薩である。地涌の菩薩は、「宇宙生命」にそなわる「空大」から出現し、宇宙創造の四大の慈悲行を自らの実践にうつすのである。

日蓮大聖人は、また、宇宙創造の四大の働きは、四菩薩の利益であるといわれる。⁽¹⁵⁾

さらに、日本の日寛上人は、四大と四菩薩を次のように記している。

「火はこれ空に上る、故に上行は火大なり。風は辺

際無し、故に無辺行は風大なり。水はこれ清浄なり、故に浄行は水大なり。地はこれ万物を安立す、故に安立行は地大なり」⁽¹⁶⁾

ここに、上行菩薩は火大に配されており、民衆の苦悩を引き起こす煩惱を焼き、これを善心に変えることよって、社会をおおう闇を照らし出す働きとなる。

無辺行は風大に配されており、いかなる障害も乗り越えて、民衆に生きる力を与えつづける働きをさす。

浄行菩薩は、水大に配されており、社会の濁りに染まらず、自ら顕現した善心よって社会を清浄にしていく働きである。

安立行は地大に配されており、万物をはぐくみ、不壊の幸福に導く働きをさすのである。

日蓮大聖人は、「御義口伝」の中で、『法華文句輔正記』の文を引いて、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩には、常楽我浄の四徳がそなわるといわれている。四徳とは、仏の生命にそなわる徳である。

「輔正記の九に云く『経に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を

表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す⁽¹⁷⁾

今、一人に具された四徳をみると、まず上行菩薩は、

「我」を表すとある。この「我」とは「宇宙生命」と一体となった「大いなる自己」である。トインビーの引用している「梵我一如」の「我」である。現代人の不安、恐怖におびえる矮小化された自我、即ち小我ではない。大宇宙の「法（ダルマ）」と一体となり、その慈悲と智慧のリズムを内実化した宇宙大の自己である。

この「大我」は、火大の働きに象徴されるように、社会にうずまく煩惱、悪と戦い、これを打破り、善心、善へと変革しつつ、現代文明の闇を照らしゆく光明となるのである。「宇宙生命」から託された民衆救済の「宇宙論的使命」を高くかかげゆく主体者である。したがって、この「大いなる自己」は、「小我」の壁を打破り、自身から他者へ、家族、民族、国家、人類へ、そして大自然へと慈悲と智慧の「橋」を架けつつ、「地球人類意識」から、「地球生命意識」へと拡大してゆくのである。このような「大我」の形成者こそ、今日の

「世界市民」と呼ぶにふさわしい人格像であろう。

上行菩薩としての「大我」の徳は、無辺行としての「常」の徳として顕在化する。ここに「常」とは、風大の働きのごとく、あらゆる障害を吹き払いながら、時間的にも空間的にも自由自在に活躍する「自由性」をさすのである。この無辺行菩薩にそなわる「自由性」が、人権としての「自由権」の獲得への仏教から見た生命論的基盤となるであろう。生命の自由度を束縛するあらゆる障害、現代文明に充滿する権力の魔性の引き起こす政治的、社会的、言論・思想的な束縛を打破り、乗り切っていく「大我」から発動する宇宙大の「自由自在性」である。

上行菩薩の「大我」からは、浄行菩薩としての「浄」の徳が発現してくるのである。現代文明におけるあらゆる領域——人種、ジェンダー、文化、宗教、貧富、階級、職業の別——における差別、偏見、貪欲、搾取、執着を打破り、今日の人権としての「社会権」を保障するための生命論的基盤が、「浄」の徳といえるであろう。

現代文明における社会の清浄化とは、貧富の格差のみならず、教育、医療、水、食糧等の基本的ニーズを公平に充足することである。そのためには、菩薩は、自らの差別心や偏見を浄めつつ、他者、社会に充滿するあらゆる領域の差別への執着の心を清浄化し、「平等心」を確立していかなければならない。差別、偏見を引き起こす煩惱に自ら染まらず、これらを清浄化しゆく働きが、浄行菩薩としての「浄」の徳である。

上行菩薩としての「大我」の働きは、「自由性」「平等性」を獲得するとともに、安楽行菩薩としてそなわる「楽」の大境涯を自他ともに確立しようとする。自己の安心立命とともに、安穩なる社会、国家の創出である。現代文明の中には、不平等、不自由に根ざした構造的暴力、文化的暴力の広大な煩惱、悪業の基盤の上に、怨念、憎悪の連鎖が、戦争、紛争、テロ等の直接的暴力として激発している。その暴力性は、「人類」社会のみならず、大自然の生態系を破壊し、地球温暖化や異常気象に象徴される「国土」の破滅をも引き起こそうとしている。

これらの人間生命、ならびに社会の煩惱、悪に挑戦し、絶望と悲惨の現代社会を、恐怖、不安を乗り越えた安穩なる状態へと転換しゆく働きが「大我」にそなわる安楽行菩薩としての「楽」の徳である。「楽」徳は、一個の人格としては「円満」の徳をさす。故に、身心調和の充実した安心の「楽」であり、決して「快樂」ではない。しかし、仏法の「縁起の智慧」がさし示すように、個人の「楽」の確立は、他者の安心立命と同時にしかかなえられないのである。それ故に、「円満」なる充実した人格の確立をめざす人は、他者、社会へと融合の「橋」を架け、ともに現代文明にうずまく恐怖、憎悪、怨念に挑戦しなければならないのである。

ここに、「善の連帯」が、自他ともに幸福、安穩のための必須条件となる。「楽」徳は、共存を与える徳である。このように、自己から社会、人類、大自然へと広がる「楽」の徳は、人権思想としての「平和の権利」「持続的開発・発展の権利」「環境の権利」、そして、何よりも「連帯の権利」の生命論的基盤となる。

こうして、上行菩薩としての「大我」の徳と、その

慈悲の働きとしての無辺行菩薩の「常」徳、浄行菩薩の「浄」徳、安立行菩薩の「楽」徳の四徳の獲得と他者への実践の中に、豊かな「詩心」をそなえた世界市民像が提示されているのではなからうか。

池田SGI会長は、狭い自我（小我）にとらわれ、「分断のエネルギー」に抗するすべもなく苦悩と煩惱にさいなまれる「人間」から、宇宙の「真理」、「宇宙生命」を豊かに呼吸しつつ、他者とともに共生、融合の「橋」を架けゆく「大我」に生きゆく「人間」への変革を、インドの友への詩の中で、次のようにうたい上げている。

『「鳥」とはサンスクリット語で

『二度生まれるもの』の謂^い』

ひとたびは 限られた殻のなかで

そして 再びは

限らない大空の自由のなかでと

そうなのだ

人間も また同じ

この世に生を享^うけつつも

閉ざされた『小我』の殻を打ち破り

大いなる『大我』の大空へと

再び生まれ征^ゆかねばならないのだ

これぞ 仏法の精髓がめざすところ

光彩陸離たる

精神の『ルネサンス』だ!⁽¹⁸⁾

「精神の大国」インドは、「詩心」の横溢した社会である。地涌の菩薩という世界市民の、この煩惱、悪業の充満した現実社会への涌出を説く「法華経」を世界に送った国土世間でもある。このインドの大地から、
『大我』に生き、常・楽・我・浄の四徳の香で、全人類に共生の薫風を送りゆく世界市民の群像が、新たな世紀の「精神のルネサンス」の光明となりつづけることを願って、この論考を閉じたい。

注

- (1) Krishna Srinivas, *The Buddha: Victory of Humanism*, Gandhi Media Center, New Delhi, pp.8-9.
 - (2) *Ibid.*, p.58.
 - (3) アーノルド・トインビー他、青柳晃一他訳『死について』筑摩書房、二二二頁。
 - (4) 同書、二二二頁。
 - (5) 同書、二二二頁。
 - (6) 池田大作「平和の凱歌——コスモロジーの再興」(第二十四回「SGIの日」記念提言)、『大白蓮華』一九九九年三月号、三六頁。
 - (7) 「池田名誉会長の「世界の指導者と語る」第三十五回クリシュナ・スリニバス博士、『聖教新聞』一九九五年六月二十五日付。
 - (8) 池田大作『人間革命』第四卷、潮文庫、一七頁。
 - (9) 戸田城聖「慈悲論」、『戸田城聖全集』第三卷、聖教新聞社、四四頁。
 - (10) 同書、四五頁。
 - (11) 同書、四八頁。
 - (12) 『妙法蓮華経並開結』創価学会版、四五二頁、四五五頁。
 - (13) 『法華文句』第九卷上、『大正大藏経』三四卷、一二五頁上。
 - (14) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会版、七五一頁。
 - (15) 同書、七五一頁。
 - (16) 『日寛上人文段集』聖教新聞社、一四七頁。
 - (17) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会版、七五一頁。
 - (18) 池田大作「月氏の曙 地涌の讃歌」、『池田大作全集』第四一巻、聖教新聞社、三九〇〜三九二頁。
- (かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)